



FDだより No.11

雑誌名	FDだより
巻	11
発行年	2008-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009397

第5回室蘭工大教育ワークショップ

今年で5回目となる室蘭工業大学教育ワークショップが、8月28日、29日洞爺パークホテル天翔で開催されました。学務担当の丸山理事による「大学の自主性・自律性と教職員の内発性」と題する講演の後、新任教員9名に、各学科選出の10名を加えた合計参加者19名が4班に分かれて、「学生の主体的な学習意欲を引き出すために」をメインテーマに、サブテーマを「学生、そして教員はどう変わるべきか?」として活発な議論が行われました。

【WS1】洞爺湖FDワークショップのスタートは、WS1「学生は授業に何を求めているか?」でした。教員は「単位の実質化」のために「学ばせる」工夫や努力をします。しかし、多くの教員は「学ばせる」のではなく、学生の自主的な「学ぼう」とする学習姿勢を求めており、さらに学生は「学ぶ」ことにより自身のキャリアを形成できることを求めています。こうして教員は学生に「このような学生になってもらいたい」という思いから、授業展開をしています。当事者の学生はどのように考えているのでしょうか。そこで、このWS1では学生の言動から学習意欲などを読み取り、類型化しました。

意欲の低い学生は、傍観的な授業態度や、遅刻、早退、中抜けがある。また自分ではどこがわからないかさえ判別が付かない、自分でよく考えないで質問をする、努力せずに単位を求めるなど他者依存型の傾向が見られるといった意見が出されました。一方、勉学意欲のある学生は、発展的な質問をする、適切な授業速度を求める、よい授業環境を求める、教室の前方に着席する傾向がある、などが教員に感じられていることでした。

多くの学生の言動を列挙した後、1つの班は、単位取得型と理解度重視型に大きく2つに類型化しました。前者は試験範囲を強く意識するのに対して、後者はよく質問をし、専門的な要求が多く学習意欲の高い学生と言えます。別の班は3分類(指向)を示しました。同じように単位を取るにしても、「成績指向」と「楽(ラク)指向」に分けることができる。とくに「楽(ラク)指向」は画一的な授業、試験準備に役立つ情報、資料の要求が著し

いなどの特徴が見られます。また、理解度を求めているが、その目的が成績を重視した「成績指向」と知識欲の強い「学び指向」とがあります。

こうして、あらためて見てみると教員は学生の言動の違いに気づいており、そこから意欲の違いを感じているのです。そこで、次にそれぞれの学生に対して、どのように挑めばよいのでしょうか。

【WS2】「学生の主体性を引き出す工夫」

本学の学生の主体性を(一層?)引き出すために、我々教員はどんな工夫をしているのでしょうか、あるいはできるのでしょうか。各班で約60分、それぞれの経験を持ち寄りながら議論をし、その後、発表してもらいました。

もちろん、学生は学力も意欲も様々ですから、それぞれに応じて、例えば「習熟度別のクラス分けを」との意見も出されました。また、「今の学生はこの授業が、何の役に立つのか知りたがる傾向がある」との指摘も出されました。しかし、全体として注目され、議論になったのは次の二つでしょう。

第一は、「グループ討論やグループ作業のすすめ」というものです。その際、発表などゴールを明確にすることでモチベーションと目的意識を高めてもらう、そして特定の学生が「傍観者」になることを防ぐため、1グループの人数を3人から5人程度にし、役割分担を明確にするなど、グループ化の条件にも議論が及びました。



第二は、「過保護をやめる」という主張です。たしかに、学生を「顧客」と見なす風潮が高まり、教員はパワーポイントを使ってより分かりやすく講義をし、相当な資料を配布して自習を促すなど、学生の要望に応じて大変な「サービス」をしています。しかし、それは本当に学生のためになっているのでしょうか。例えば「パワーポイントより板書の方が集中力を維持できる」という声もあります。また、「社会に出ると甘くない、自分で整理をしてノートをとるのはあたりまえ」と、有力な主張も出されました。もちろん、反論もあります。今、目の前にノートをとることもできず、授業について来れていない学生がいることも事実です。さてさて、どうすべきでしょうか。結局は、対面している学生に応じて対処することになるのでしょうか。また、この論点、学生は何を求めて大学に来ているのか、「社会に出るための準備?」「自分に合うおもしろいものを見つけるため?」…、と相当根は深いようです。



【WS 3】「主体的な学習意欲向上策」

WS 3ではケーススタディをとおして、具体的な対応策について話し合い、さらに議論を深めることを目的としました。最初に班ごとにくじ引きを行い、授業設定を決めました。主専門科目で100人授業という点を共通とし、①必修科目、1年生前期、②選択科目、2年生、③必修科目、3年生、④選択科目、3年生、の合計4つのパターンを用意しました。

まず班に与えられた設定ごとに、本学の学生に見られる授業態度・姿勢から、主体的な学習意欲が見られない状況例を挙げ、続いてこうした点の改善につながる授業ツールのアイデアを出し、その効果について議論を進めました。

学年にかかわらず共通している指摘は、学習意欲や授業マナーにおいて二極化する学生に対して、クラスの実情を把握した上で適切な対処をとることの重要性でした。1年生前期をモデルケースとした班からは、マナーに関して最初にしっかりルール化することとともに、授業の中での学生を指名して問いかけたり、グループ学習、実物を見せる、などによって学習意欲の減退を抑制する工夫が提示されました。2年生には、出欠確認、定期的な小テストの実施といった具体的なツールが紹介され、学生が自らの修学度を確認可能になる工夫が提案されました。一方、3年生の場合は、授業内容に興味を持っていない学生と持っている学生が2極化し、双方への対応が必要

であり、前者には実社会とのつながりがわかるように過去の失敗例・成功例の紹介を行うこと、後者にはマスメディアに取り上げられた最新の話題の紹介や、宿題を課してより深い学習を促すことの重要性が指摘されました。

【WS 4】「教員はどう変わるべきか?」

WS 1～3においては、学生の学習意欲向上のために、教員側の視点から学生を捉えて議論されましたが、WS 4では視点を180度変更し、教員の行動等を顧みて、学生の学習意欲やモラルの向上のために何が必要か、あるいは、どう変わるべきかについて検討されました。学生の学習意欲やモラルの向上に対して、プラスあるいはマイナスとなるような教員の行動・態度が、講義や研究指導等の経験に基づいて具体的に列挙されるとともに、それに対する対応が検討され、その結果が各班から発表されました。採点基準、提出物の締め切り、挨拶、学生との約束、私語および欠席・遅刻・中抜けなどに対する教員の対応が議論の中心となっており、これらについて、統一された行動の必要性が指摘されました。特に、授業に関する私語や欠席・遅刻への対応については、すべての班から、大学としての最低ラインの統一が必要であることが提案されました。現在、本学に入学する学生が多様化し、教員は工学に関する専門知識の教授に加えて、モラル（社会人としての常識）教育も必要であるように強く思われました。

その他には、学生をよく見て対応すること、熱意を持って授業に望むこと、90分の授業を30分ごとに纏めること、学生の名前を覚えることなどが、プラスになることとして提案されました。このWSの参加者は専門分野や経験が異なっておりますが、同様なことを問題点として意識し、また、それに対してさまざまな対応策を考えられていることを知りました。様々な対応策の一つでも実施されることを願います。



【表彰】ロゴデザイン

アイスブレイキングでは、25分間で各グループの愛称名を決め、それをイメージするロゴの作成を行いました。

グループ1「N²HK」の作品は、通行止めの道路標識の中央に「FD」と描いたロゴで、従来のFDの概念を打ち破るという強い意欲の現れを感じました。グループ2「シャープツー」は、メインボーカルにコーラスを加えて豊かなハーモニーを生み出すように、音楽好きの5人が協力してワークショップに取り組む意欲が感じら

れる作品でした。グループ3「ジャングル」は、大学の内外を取り巻く現状を未開のジャングルにたとえ、そこでさまよう教員や学生を表現したロゴでした。

グループ4は、右に示すような山の頂上を目指してヒッチハイクする学生を中心に据えたロゴマークを作成しました。車好きの5人ならではの作品であり、バランス感覚が良く、色彩的も優れた作品でした。審査の結果、このロゴが今年度のアイスブレイク賞に選ばれました。



【表彰】ワークショップ賞

どのグループも学生の主体的な学習意欲を引き出すための方策に積極的に取り組み、プレゼンテーションは優劣を付け難いものでありました。その中でもグループ1（写真）は、学生の学習意欲の経年的な変化を捉えつつ、学生の個性や能力に応じた的確な対応方針が明示し、具体的な方策を提案した点が評価され、今年度のワークショップ賞に輝きました。



参加教員（敬称略）

荒井 康幸、磯田 広史、魚住 超、岡田 吉史、
岡本 洋、鏡 愼、神田 康晴、葛谷 俊博、

栗橋 祐介、齊藤 務、佐藤 信也、鈴木 淳、
鈴木 雍宏、永松 俊雄、中津川 誠、中根 英章、
松元 和幸、廣田 光智、湯浅 友典（以上19名）

I D E 大学セミナー

平成20年8月21、22日にI D E（Institute Development of Higher Education）セミナーが札幌で開かれ、道内大学、高専、専修学校から100名以上、本学より松岡学長、丸山理事、木村教授、安居准教授が参加した。I D Eは各大学の学長を理事と置く連携組織であるため、高等教育機関が取り組むべき重要課題がセミナーのテーマに選ばれる。20年度は「いかに学生の学習を促すか」という1週間後に開かれた室蘭工業大学FDワークショップ in 洞爺湖のメインテーマである「学生の主体的な学習意欲を引き出すために」に近い問題提起であった。

特別講演

「多様性にそった自学自習の環境づくりの試み」

名城大学副学長 池田輝政氏

講師自身が持つ「人材育成学」（200名超の受講生）の授業アンケートを分析した結果、とくに興味工夫、興味魅力の項目において、教員の自己評価と学生評価に大きくギャップがあった。教員の思いが空回りしているかの様相を示していた。また、自学自習時間は、約6割が全くしておらず、学力レベルに応じた選択型課題の提供が必要と感じた。こうした経験から様々な学習機会の提供が大学に求められると判断し、国際視野の獲得を目的とした「英語多読プロジェクト」を開始した。ここでは多様な分野に対応した英語図書の拡充と専任スタッフによる柔軟な対応がある。

「学生の成長を支える大学の環境」

同志社大学教育開発センター長 教授 山田礼子氏

学生の成長に影響を与えるカレッジ・インパクトは、学生自身が持つ要因、学生を取り巻く大学環境、そして大学生生活から得られる成果の3つによって決定される。そこで大学環境（教員との交流、友人との関係、専門分野、部活動など）が学生の情緒的側面に与える影響を分析した。その結果、大学環境に満足する学生ほど2タイプのポジティブ学生を生みだし、その学生ほど自己決定力指向が高い。逆に自己決定力の弱いネガティブ学生は大学環境に満足はしていなかった。国立、理系ほどネガティブ型が多いため、とくに初年次に影響を与える大学環境の整備が必要である。こうしたことから、山田氏は初年次教育学会を2008年度に主宰する。

2日目のシンポジウムでは、e-learning、自己採点ツール、キャップ制、そしてQfGPA（高得点を高く評価するGPA）などが紹介された。

英語の能力別授業の話題：英語科目における習熟度別クラス編成の構想について

共通講座 松 名 隆

国際化時代における、外国語とりわけ英語によるコミュニケーション能力の向上という課題を、大学の語学教育に対する重要な社会的要請として受けとめ、本学の英語教育においても、様々なカリキュラムの編成を試みてきた。しかし、「英語コミュニケーション演習」という科目において、1学科4クラスの少人数編成を実現し、それが軌道に乗りつつあるとは言え、それは、他の多人数のクラスと同様に、英語力に大きな差がある学生達を、同じクラスで学習させるもので、そうすると、授業レベルの設定が難しいというのが実状である。そのような中で、平成21年度の新1年生から、英語の少人数クラスの拡大に併せて、そのクラス編成を習熟度別に行うことを含めた改革案について、これから教育システム委員会で議論が始まろうとしている。そこで本稿では、この改革案の中の、習熟度別クラス編成に的を絞って、その具体的な中身を紹介し、英語以外の科目における習熟度別クラス編成の検討の参考に供することとした。

まず、1年前期に実施するCollege TOEICのスコアを用いて、後期に開講する新たな「英語C」において、初級・中級・上級という少人数・習熟度別クラスを導入し、レベルに合った教材、内容、方法できめ細かい授業を提供する。初級では、中学・高校で習う英文法基礎を徹底的に復習する。中級・上級では、様々な楽しいアクティビティを通して英語を練習する。これによって、従来の非習熟度別クラスと違った、ある程度の授業レベルの細分化を図るものである。因みに、このレベル分けの基準は、College TOEICのスコアで、初級：299点以下、中級：300～399点、上級：400点以上としている。

さらに、2年前期に開講する新たな「英語E」においても、初級・中級・上級という少人数・習熟度別クラスを導入し、そこでは「英語セミナー」として、学術雑誌の論文を読むための準備的学習を行う。

また、2年後期および3年前期の「英語コミュニケーション演習I」においても、従来の少人数クラス編成に加えて、初級・中級・上級の習熟度別クラスを導入し、外国人教員担当による、コミュニケーション、プレゼンテーション能力向上の実践的な演習を行う。

このように、改革案では、「英語C」、「英語E」、「英語コミュニケーション演習I」において、初級・中級・上級の習熟度別クラスを設定しているが、問題は成績評価をどのように行うかということであり、同じ科目であっても初級の「優」の評価と上級の「優」の評価は、その内容が当然異なるものである。そこで、成績表の上では、この評価内容の違いを明確にするために、例えば「英語C（初級）」、「英語E（上級）」のように、科目名だけではなく、そのクラスの習熟度別レベルも明記することが望ましいと考えられるが、これは、英語だけではなく、どの科目で習熟度別クラスを実施する場合にも、必ず直面する問題であろう。したがって、この点をどのように解決していくかは、大学全体で取り組むべき課題であり、これからの活発な議論を期待したい。

以上、本学の英語教育における習熟度別クラス案について、手短に紹介させていただいたが、これは、これから教育システム委員会で議論されるもので、現時点ではまだ全学で合意された改革案ではないことを理解された上で、今後の本学のFD活動に役立てていただければ幸いである。

FDワーキンググループの紹介

教育システム委員会の作業部会の一つとして、本学の教育力の向上をめざした活動を行っているのがFDワーキンググループです。冒頭で紹介した「室蘭工大教育ワークショップ」のほか、講演会などFD関連行事の企画・実施がおもな仕事です。これらの活動内容については、随時、この「FDだより」で紹介してまいります。

FDワーキンググループは、委員および教務課職員とともに、前年度までのワークショップ受講生で構成されるタスクフォース（TF）によって運営されています。平成20年度のメンバーは以下のとおりです。

委員長：木村克俊（建設）

副委員長：安居光國（応化）

委員：塩谷浩之（情報）、佐藤孝紀（電電）、澤口直哉（材物）、奥野恒久（共通）

教務課：松本典久

タスクフォース（TF）：吉田英樹（建設）、藤木裕行（機械）、須藤秀紹（情報）、大鎌 広（電電）、太田光浩（応化）